

22 「乳巖姓名録」に現れた乳癌手術患者の予後

松 木 明 知

紀州の華岡青洲は麻沸散、一名通仙散の投与による全身麻酔下に、多くの種類の手術を行った。中でも青洲が最も熱心に行ったのは、乳癌に対する手術であったことは、全身麻酔下の最初の手術が、文化元年(一八〇四)十月十三日に行われた和州の五条駅の藍屋利兵衛の母「かん」の左乳房癌の手術であったことや、乳癌患者の姓名を記した「乳巖姓名録」が遺されていることよって首肯される。

「乳巖姓名録」には、異本があるが、些細な点を除けば基本的に違いはない。そこで、呉秀三の著書『華岡青洲先生と其外科』に収載されている「乳巖姓名録」が最も普及しているのを、これを対象として研究した。

「乳巖姓名録」には合計して延一六五名の患者名が記

されているが、各々について、年月日、住所、名前、そして少数例ではあるが、再発や三発などの記載や切除腫瘍の重量についても記述されている。再発例が六人、三発例が二人いるので患者数としては一五五人である。右の年月日は必ずしも手術日を指すのではなく、初診日ないし入院日と思われる場合もある。

「乳巖姓名録」の最初の三人の患者は手術を受けていないことが判明しているから、手術を受けた患者は計一五二人となる。

演者の長年の調査により、最初の手術患者である五条駅藍屋利兵衛の母かんは文化二年(一八〇五)二月二十六日に死亡したことが、五条市講御堂寺の過去帳によって判明したので、かんの手術は、文化元年(一八〇四)十月十三日に行われたことが確定し、従来の定説を覆した。従ってかんの術後生存期間は約四ヶ月半であった。

さらに演者は青洲在世当時の華岡家の菩提寺である地藏寺の過去帳を見出し、その中に三人の患者の歿年月日を見い出した。

「天保二歳四月九日ニ来ル、備中浅口郡玉嶋村 爪崎

吉助 妻(行年三十九歳)、「文政十二年九月晦日(附落)、阿州名西郡 茂松村 三木太 妹(核量三錢五厘)」、「文政十三年庚寅三月二日、尾州津島 松原定碩 妻(行年三十四、核量九錢五厘)」の三人である。右の三人の術後生存期間は各々二日、一ヶ月と八日、一年一月九日である。

演者はその後も鋭意「乳巖姓名録」中の患者の歿年月日を特定したいと考えて調査しているが、「乳巖姓名録」の記述がしばしば不正確なため、患者の住所を特定することが出来なかつたり、住所が特定出来ても、菩提寺が特定出来なかつたり、菩提寺が特定出来ても過去帳が火災などで焼失したり、また過去帳があつても、時としてプライバシー保護のため調査不能といった状況があるため、研究の続行は極めて困難である。

例えば小豆島からは三人の患者が青洲の許に赴いて四回手術を受けた。演者は小豆島の全寺院を調査したが、いずれの患者の歿年月日をも特定することは出来なかつた。

「乳巖姓名録」の中には住職の妻が五人見出しされる。寺院は時代の流れの中でも存続の可能性が高い。各地に

問い合わせる各々が現存していることを確認し、実際に調査して、摂州兵庫尻池村の高福寺(「乳巖姓名録」には「光福寺」と記載)住職の妻「その」(文化十年二月二十日歿)と勢州津在田中の本光寺の内室(俗名不明)(天保五年七月八日歿)の歿年月日を特定することが出来た。さらに他にも調査して新に三名の歿年月日が判明した。

これらの調査によって「乳巖姓名録」中、死亡年月日を特定出来たのは一五五名中十人(六・五%)に過ぎないが、調査の結果の詳細について報告する。

(弘前大学医学部)